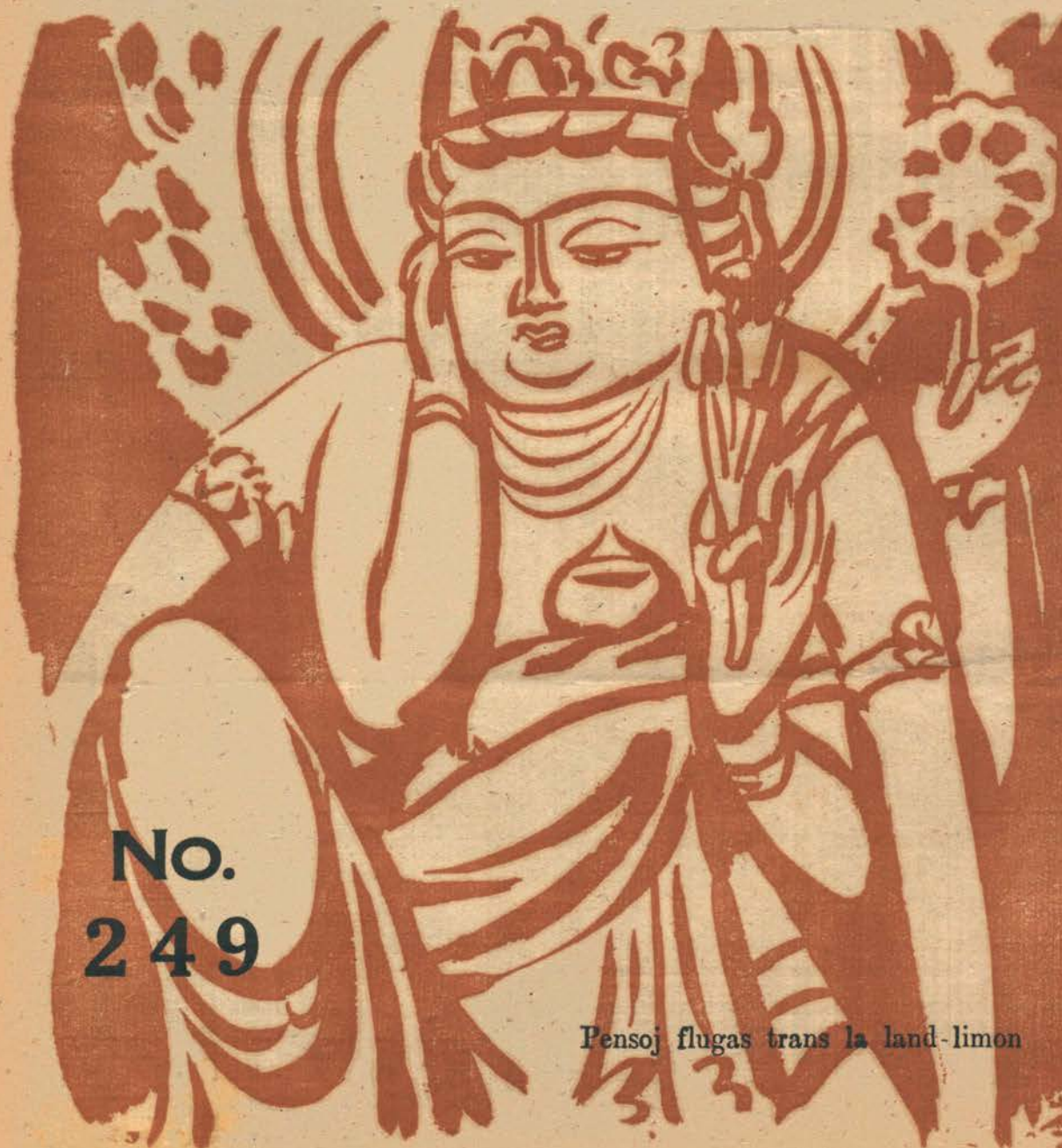


宰主★郎路生麻

川 柳 雅 証



昭和二十三年七月一日發行
第一冊 第二冊 第三冊 第四冊
（全一冊）

初刊大正十三年・通卷二百四十九號

No.
249

Pensoj flugas trans la land-limon



二つの苦言

— 柳界の新鮮味を待望して —

全國川柳大會私案

こゝ一年ほどの間に、柳社も殖えだし、柳誌も殖えて来たが、それが必ずしも文化國家を目指す再建日本の柳界發展を意味するパロメーターとは云へないものがあると思ふ。

柳社をつくり、柳誌をつくること、それ自體に興味を繋いでゐる所謂遊びの範圍を出ないものも相當に見うけられるからである。

川柳することが單なる遊びであれば、それで事は足りるかも知れないが、川柳することが遊び以上のものであることを認識する時、お互ひが、結社をつくり、機關誌を出しただけで満足し得られるものではない。

そこで、川柳そのものの研究、内容的前進に思ひをめぐらすにはあられないことになるのであるが、近ごろの柳界を見てゐると、一二の雜誌

以外にはそこへ頭が働いてゐると思へない。

各地に於て、さかんに川柳大會が開催されるのは、が、その大會の多くが、長屋の懇親會以上に出ないのでは、川柳文化の前途もまことに際遠だと云はねばならない。尤も、それ等の大會にはそれ等の大會としての使命もあり、意義もあるのであるが、こゝに私の云はんとするのはそれ等の大會に就てではない。

近く二つの全國川柳大會が開催される——一つは山形縣下で、一つは名古屋市中で——私はこの二つの全國川柳大會に選者としての榮譽を擔はされてゐるので、これを機会に、私の全國川柳大會觀を述べて見たいと思ふ。

本來から云へば、全國川柳大會私案なるものを今度の大會に提案して大方の賛同を仰ぎたいのであるが、前述の如く、近ごろ行はれる大會では、愚案に耳を藉すだけ

の時間が與えられそうにもないので、誌上に掲げて大方の叱正を仰ぐこととしたのである。

従つてこゝに述べやうとする全國川柳大會案は、山形縣下の全國川柳大會や、名古屋市中に於ける全國川柳大會とは全く別箇のものであつて、それ等の大會と混同されないことが望ましいのである。山形縣下のは愛柳社の主催で、その社の復活二十周年、愛柳社報創刊記念と田林星陰先生感謝を兼ねての全國川柳大會であり、名古屋市のはずば笠川柳社の主催であつて表面は兎も角、伊志田孝三郎氏がすげ笠同人となつたのを機會に大會を催すことの事であつたから共に、その社の宣傳と懇親を兼ねたやうな川柳大會であつて、嚴密に云へば全國の名を冠するのにはふさはしくないものなのである。斯く云へばとて二社の大會に、ケチをつける所存はない。私もその大會の選者として招請され、それに快諾を與えた以上、その大會を抹殺して快よしとするものでないことは勿論であり、私自身その大會に對する責任の一端を擔つてゐるのであるから、おそろく誤解されることはなからうと思ふ

が、一言を費しておくこととする。前述したやうに、それ等の大會と私の「全國川柳大會私案」とは全然別箇のものである。

私の云ふ全國川柳大會とは全國の二字を冠する以上、全日本の川柳人のための川柳大會であつて欲しいと云ふのである。従つて全國川柳大會は全國の各柳社に據る合同主催とし、日本を幾つかのプロツクに分ち、そのプロツクの何れかで年一回開催することとし、費用は各柳社で分担と云ふことにする。(柳社をABCの三種位に別ち費用の分担に大中小をつけること)尤も主催地の各柳社には格別のサービスをして貰ふことは現在行はれてゐる大會に準ずることになるだらうが、何も彼も主催地柳社の負担としないことにしたい。

全國の各柳社は、この大會の一役員であると同時に、この大會に、その社のエキスパートを公認出席せしめる。各社の公認出席者は分担費用其他と睨み合せて數を決定する。公認出席者の旅費は原則としてその社で負担することとする。(或は大會費で賄ふこととする)そして柳界への提案、又は研究の發表講演を

なさしめるのである。尤も、提案も講演も各社の自由意志にまかせ、なくともがな提案や、お座なりな講演を避けることとする。提案及び研究發表が多すぎる場合は大會委員で互選してなるべく新味あるものを採擇する。各社で公認された出席者以外の出席希望者に對しては特別の會費及旅費等を各自で負担せしめることは云ふまでもない。

右に述べた組織で全國川柳大會を開催すれば、柳界を發展せしめるに足る種々の提案が各社から提出されやうし、川柳に對する新しい研究の發表が、この大會を通じて、檢

大丸の 商品券

30. 50. 100. 300. 500 円 5 種

京・阪・神 三店共通

大丸 大阪都戸

大丸 京都

討され斯界を裨益することとなるであらう。なほ、同大合は、午前中は作句。午後は提案、研究發表其他。夜間は懇親會と云ふやうな方法で行うとすれば、まことに有意義な全川柳大會となるであらう。以上はスペースの關係上、私案の大略に過ぎないが斯うした意味の全川柳大會が實現されたならば柳界に於ける權威ある大會の一つとなつて、選考公認問題などの解決にも一歩近づくのではないかと思はれるし、有爲な川柳人できへあればよしや旅費が自辨出来なくとも、大會出席の機會に恵まれるであらうし、作家を奨励すること、斯界を向上發展せしめる手段たり得ると信じて疑はないのである。敢て柳友諸氏の

一考を煩はしたい。從來行はれて來た大會の多くは主催地吟社の負担を餘りにも重からしめてゐる嫌ひがある。従つて金のある吟社でなければ大會が開けないし、金と時間に餘裕のある川柳人でなければ出席出来ないといふ憾みが多分にある。多額の費用をかけて主催した吟社が大會そのものをその社の宣傳の具とすることの一應うなづけないこともないし、多額の旅費を投じて出席した柳人が、興味中心であり、懇親會式大會であることを希ふのといわれなしとは云へないであらう。そしてそれ等の大會へ出席の所謂大家なるものが、折角の好機會に臨みながら、柳界を向上せしめる一言すらなし得ないで、單なる社交辭

令で引下らねばならない原因に就ても篤と考えて見る必要があるのではなからうか。

事後承諾に就て

事後承諾と云ふことは、緊急を要する場合の、非常措置として萬已むを得ないことであり、又非常に便利な一方法でもあるが、ムヤミに事後承諾で事を行へば後味の悪い結果を招來することも心得ておかねばならない。

必ず承諾してくれる問題であると思つても（内端なら兎も角）他社の人達の場合には一應内容の説明をして、承諾を得るべきだと思ふ。假りに川柳大會の選考の如き、可能性充分だとしても、事後承諾とすべき性質のものではない。例へば某氏が出席される

大會の選考はホンの一例に過ぎないが、近來柳界に事後承諾的行爲が屢々行はれて自他共に面白くない結果を招いてゐるので敢えて一言する次第である。

中堅作家は脆弱性か

文化國家を目指す新日本の柳壇に、新しい指導性を持つ川柳人があらはれないと云うことは實に寂びしいことである。從來大家と稱せられた人達にして今後の柳壇を引きずつて行くだけの力が不足してゐるとすれば、勢ひ中堅作家の中に、そうした人達をもとめなければならぬが、果して中堅作家の中に、そうした指導性を持つ川柳人がゐるかどうか。或る人達は直ちに、中堅作家の脆弱性を論じて、その存在を否定するが、私の觀るところによると必ずしも、その否定はあたらないと思ふ。

なるほど、新しい指導者としてのあらゆる條件を具備してゐる中堅作家はゐないであらう。しかしながら磨けば光る作家、ポストを與えれば指導のむちを振るひ得る作家は十指を以て數へることが出来ると思ふ。

では、それ等の中堅作家は何故に擡頭しないのか。それ

は、それ等の作家の誰かが、現在の黒潮に乗つてゐないからであり、例へば黒潮に乗らうとしても、既成大家の川柳政治性の重壓に制せられてゐる作家もゐるであらうし、黒潮に乗せてやらうとしても、作家自身がよく乗切らうとする自信を持ち合さないのである。この点最も大きな障壁をなすものは川柳では食へないといふことである。そこに中堅作家としての脆弱性が胚胎するのもかも知れないが、私自身から云へばそれは一つの杞憂でしかないと思ふ。これからの柳壇を脊負つて立つものは、我等中堅作家の外にはないといふ自信と氣魄を持たれたものである。

何れにしても、新しい指導性を持たぬ既成大家は此の際潔く後退すべきである。彼等にいつまでも腰を据えられてゐて、しかも柳壇の興隆をのぞむことは木によつて魚を求むるに等しいのではあるまいか。斯くは云ふものの、それ等の大家は何れも私にとつては多年の柳友に外ならぬ。情に於ては忍びないものがあるが柳壇革新の實を擧げやうとすれば勢ひ已むを得ないのである。微力な私自身も同時に追放組の一人に加えられることも敢えて憾みとはしない。（路）

不朽洞句抄

麻生路郎

魚釣で暮らしてゐたも死んでゆく
新築新築負けた國とも思はれず
病院はまだ迷彩のまゝで立ち
停電の中へガタピシ父歸る
なんどなく騒がし寺におむつす
軒先に下駄にもならぬ桐がのび



大阪市 浪 玲 之 介

道普請やおへん大根まくところ
僧正も二重に米を貰ふ智恵
鐵橋の線路を歩く氣で暮し
ちと樂になつたが友の氣に障り
賣り喰ひをしても人にやる子が居らず
憲法は知らず 蜜 豆 寶 塚
生きて行く恩師惨めな指の節
商賣は機なり敏なりローソク屋
思はざり大阪で持つ肥ヒシヤク
父ちやんの煙草へ家計簿から抗議

大阪市 武 部 香 林

生活不安ヒューズが切れたやうになり
一本の撫子人を詩人にす
打水をこの手で打ちし安らかさ
下戸一人乗のやうに忘れられ
盆踊り踊りたくなる手を見つけ
尺八が聞こえて秋のもののおもひ

金の雨 (二句)

粗板の音も嬉しい金の雨
金の雨瓦の艶もしたしまれ
半パンツ常務は鶴の様な足
間屋には惜しい器量で買ひに出る
陳情を尤もらしく聞き流し
伊丹市 岩 崎 柳 路

マドロスの社長へ税金嵩むなり
三角くじで當てた金鵒だ喫い給へ

奈良縣 上 田 翠 光

戀人の偉さは辭書の要る便り
プラトニックラブ虫をほめ月をほめ
しやべつてゐるひまの湯呑に蚊が溺れ
塗りたてるだけの弱さを知つてゐる

大阪市 福 田 妄 夢

ふたアリへ青きもみじも亦たのし

山口縣 岡 村 路 三

雜音をきいても女房の口が過ぎ

大阪市 市 場 浚 食 子

生活詩馬鈴薯と組み茄子と組み

思ひかへして妻の手仕事手傳ひぬ

安い頭さ誰にでも下げ

百姓の同情月給取りかいな

暑いのに齒を抜く方に抜かれる方

大阪市 須 崎 豆 秋

あべの橋たれに買はれるうさぎやら

かほるさんを悼む

かつぼれくさいの河原のかほるさん

遅配でもお白粉つけて紅さして

金が無いからよ三角くじをひく

勤続二十年天井もなつかしや

チンピラは仕立家銀次になるつもり

捨てられたひとが戀しうなる日あり

湯桶こす湯の香にしばし故郷思ふ

東條を憎む日もあり嫁き遅れ

働いてゐるは戻つた姉ひとり

叱られる椅子を給仕に進められ

髪分けてピースを吸ふてまだ十五

女通譯の前身をみな知らず

滋賀縣 北 川 春 巢



拾年を川柳に觀る

滋賀 鈴木石鹿

拾年と云へば、泰平無事な頃で
も一と昔、いはんやこの十年。昭
和十二年の「川柳雜誌」に、時の
流れの激しさを觀る。雜吟を見る
に時事吟が非常に少ないのが目に
たつ。日華事變の始まつた八月
號、九月號あたりから、戦争に因
む句が多くなつたが、それでも今
日から較べると少なく、悠々た
る泰平の氣分が句の面に流れて
ゐる。

時の流れの最も目につき易いのは
物價や金銭だが、これは略す。
(第四號の路郎先生の「川柳と物
價の話」参照) たゞ新年號に編輯
局からハガキで「暮の財布」(但
し十二月十日頃)をたづねた回答
がある。其の現金在り高は須崎豆
秋氏三圓三十八錢、品川陣居氏一
圓八十八錢、橋本綠雨氏二八圓四
六錢、安川久留美氏九十錢、小林
不浪人氏二四圓七錢と云ふのが今
になれば一層面白く感じられる。

頸筋に見惚れ八階まで昇り
黙 平

襟足の美しさと云ふものを娘さ
んよ御存じですか。お風呂にも十
分はいれないし、頸筋まで塗つた
ら白粉代がたまつたものじやない
とでも仰言るのですか。襟足の美
しさを忘れた日本、それが現在の
姿でもある。

○ 頸筋に見惚れ八階まで昇り
黙 平

○ 襟足の美しさと云ふものを娘さ
んよ御存じですか。お風呂にも十
分はいれないし、頸筋まで塗つた
ら白粉代がたまつたものじやない
とでも仰言るのですか。襟足の美
しさを忘れた日本、それが現在の
姿でもある。

○ 新店のそれもすぐ来るやう
に言ひ 路 郎

何んでも彼でも揃へてゐたら、
それは老舗にあらずして、開の店
ですよ。老舗なんて封鎖預金みた
いなものです。

○ 福壽草松にしたがひ候かし
萌 乃

衣食足らざれば、福壽草を忘れ
るなんて、アサマしき限りじやあ
りませんか。目で見える花より喰べ
られる野草を求めてハイキングで
すか。

○ 酒樽を春に女將の片えくぼ
柳 次

メチールに就たる上戸には、
夢にでも見るより仕様のない風景

○ 寝轉んで正月ならぬ新年號
木 履

「新年號」の有つ語の響、もう
智識人にも忘れられようとしてゐ
る。思へば、廣告を讀まれた昔
が懐しい。

○ 外交員迫力のない家へ来る
紫 陽

こんな商賣もあつたが、外交員
のネバリ強さで加入した保険を考
へれば、だまされた感じが残る
だけ。

○ 菊一鉢ミルクホールは秋に
双 亭
なり
二十歳前後の若者にミルクホー
ルの説明をすることのむすかしさ

もうないと思たか古着屋寄付かす
食へ過ぎて寝にくかつたを羨ませ
うちの茄子俄然なり出し九月く

奈良縣 尾崎 方正

男子誕生父呑み續けのみ續け
配給の酒で出産もの足らず
男女同權女はやはり子を産むの

大牟田市 高田 抱逸

醉がさめ俺だけだつた泊り客
金策の義理ある姉と思へども
父兄會こゝにもボスの巾がき
泊られて夜具やお米と申されず
友白髪戰災に遇ひ水に遇ひ
片思ひそれも我が娘のやうな娘に

大阪市 木下 幽王

到々妻の背をさする日が來た
おや／＼ねづみ君もまだ生きて居たか
風鈴物狂はしく夕立を知らず
親を安心させる心算が留置場
腹へればトマトの赤さ目にいたい
夕焼小焼明日はお米の配給日
破れ疊の上に母の歴史終らんとす
云ひにくいところは大阪辯で言ひ
君飛行機がこんでる淋しいね
恐る／＼聞いたは大匠の御趣味
新入社彼も矢張りジャジャ馬か

鳥取市 中島 鐵洲

黙つて聞けばピースが日に二つ
エキスパートなど／＼編て聴きに來る
女房もう先きに寝るのも憚らず
骨董を離す淋さ羨まれ
祖父の眼鏡が適ふも淋し
割り切れぬ世の中だもの晝寝せう

大阪市 水谷 竹莊

看護婦の話題やつぱり戀の事

下松市 弘津 柳慶

十五夜の海の底見りや童話めき
洗濯へ鼻聲で來る一人子

大阪市 稻葉 鳩花

朝顔の一つ咲いてる夏の暮
俳優になればなつたで冷やかされ
劇場で見たは昔の許婚

鳥取市 杉谷 湖山

家庭菜園が馬糞拾ろはす
神木の計畫船と云ふが朽ち
ゴム毯の如く青葉の下を行く
自生してヒマよお前も見捨てられ

大阪府 淺田 鴨水

物價高困る／＼とピース吸ふ
四十過ぎ矢張りセンチな日を持てり
湯水池 運動場にする子供
配電社規則ですよと味氣なし

○

松山前田 五健

貸しようも借りようもあるたばこの火
田園の詩か食用蛙バス
これなしにおへそ押える可愛い子
氣の毒な顔二つつかぬライター
安いでせう農家の買った金屏風

大阪市 橋本 綠雨

賣喰いを朗かに云ふ立話
バラックに蘆花も露伴も生れ來ず
慰みの南瓜の蔓の這い次第
天皇も人間になりすし威り
銅像は消えても星のまた／＼世
豆紋り實は工場の女形

が、お解りでせう。牛乳を吞ます
店ではどうかと思はれますよ。

米相場下落つゞきで晝の月

立帆

年に一度決めたら動かない米の
價格、それも年貢米、供出價格、
消費者價格の三本建の前に、ヤミ
値があるに至つては、ヤミしき
こと限りなき世ですわい。

炭ついで子の月給を待つて

浪二

子の薄給に露命をつないであつた
家産でも、炭をついでゐたのです
ぞ。僞政者よ。お解りですかれ。

十二月正月からの借もあり

山川兒

掛取風景がなくなつたと云へ

秋である

加賀 前田 義風

記念日會だ？ 大會だ！ やつ
ば秋

柳誌の産聲しきりに多し、産兒
制限あながち人ばかりでもなさ
うだ。ちいさくとも山椒の實、大

きくても、がらんどうでは、大かな
らずしも小をかれるに定まらず、

さりながら、骨のあるもの、腹み
こたえのあるものを、かつ望して

ゐるのが柳壇の現状ならずや。

○

由は紅葉、人は老すい、佛に立

ば、それまでだが、信用をお互にし
なくなつたと云ふたなら、そぞろ
寒む氣がいたしませんかな。まし
て、一年も貸して置くんて、十
年昔の人は氣が長かつたのでせう
か？

○

夜は更けて密柑の皮と吸殻
と

今では、これをしも贅澤と云ふ。

○

どうせ買はせるまでのサー
ビス

水車

買出しが、稻刈を手傳つたり、
芋を掘つてくれたり、お土産を下
げて來たりするので、お土産を
句は「どうせ賣つてくれるまでの
サービス」とせれば納りがつかぬ
らしい。十年の歳月が中亡を動か
したらしいです。

（終）

るにも順番通りにゆかぬところに
人の世の惱みがある。

○

老作家ひとしく名句者たらす、
新進かならずしも駄句ばかりとか
ざらぬ、世は秋である。

高級化粧料を管には動器！
サマギンの……

黒硝子

大阪東大橋長崎
西堀一丁目四番
山銀株式會社
電話福川四四七番



續川柳講座 (10)

麻生路郎

時事を詠んだ句に就て

新聞記事になるやうな社會のあちゆゑの事象を詠んだ句を川柳では時事吟と稱して居ります。主材が主材だけに、時事吟の多くは穿ち、皮肉、諷刺、滑稽等の味を強烈に放出して世人の喝采を博するのを主眼として居るやうであります。時には意識的にある種の人達を諷し、その反省を目的として作句されてゐることもあります。しかし詩味に乏しい點と、時の流れによつて句の生命が、句によつては特に稀薄になる點から、川柳としては詠史川柳などと同じ様に第二義的のものとして扱はれて居ります。

「柳樽」などに難句が多いのは、この種に屬するものゝ多いことを示して居るやうであります。嚴密に云ひますと從來の川柳の大半は時事吟だと云ふ觀方も出来ないことはありません。が、封建時代に

育生された古川柳が、一面娛樂的存在であつたと同時に、他面には落首的な役割を持つてゐたと云はれるのも、時の作家がこの時事吟を多量に詠出したのが原因をなしてゐるのだと思はれます。

翻つて今日の川柳を検討いたして見ましても、かなり多くの時事性を持つて居ります。時事性を持つといふことは必ずしも川柳文學に限られた譯ではありませんが、一つの特徴として指摘することが出来るやうであります。従つてそうした時事性が川柳を非詩性に誘導する陥穽となつてゐることも、うなづけるのであります。斯う考えて見ますと時事川柳が第二義的に扱はれたのも理由のないことではありません。と申しましても時事吟のすべてが非藝術的作品であるとは云ひ切れないものがあるのであります。時事性を持つと同時に詩美に觸れてゐる作品の存在することも否定し得ないと思はれば、時事

吟に興味をもたれる作家は特にこの點に留意しなければならぬのであります。次に時事吟の例句を擧げて更に細説することといたします。

我々が今食ふ米へ閑談也

紅しょうがたけの配給ですか

開市があるぢやないかは持つてゐる

配給はまた母ちゃんをぬがすなり

あの徳士今度は民主主義を賣り

葬式で逢へばお米はおまへんか

よい雨ですと疎開者の如き

男女同權それから生傷の絶えず

人寄れば何んの配給かと覗き

新聞の上だけ配給樂になり

婦人運動男の好きな顔でなし

メガホンの同じ穴から民主主義

そいぢらでお茶でもなるとも

元目をあわれけちく酒を飲み

日本の表情タブロード版に出る

正何位勸何等の倒けた墓地

(柳路)

(柳路)

斯うなればコンニャクも生き
香も生き (久留美)
吉田首相に呈す
往射撃持たれば暗者を辭めな
はれ (香 悠)
五〇〇名社交係を募る灯よ (登 龍)
ほとけさんこれ十圓のまんじ
ゆです (豆 秋)
お茶菓子へうっかり値ぶみし
てしまひ (縁之助)
竹松におむつを干していつ天
氣 (鶴 風)

少し、例句が多過ぎたかも知れませんが、配給に關する句などは一括して説明してもいゝと思つたので斯く多數に例示することにしました。

「我々が」の句は二千五百九十九年の十一月か十二月頃に詠まれた句だと思ひます。豊原瑞穂國に米がないと云ふ騒ぎなんです。未だ前例のないことです。米の内閣が狼狽したのも無理がありません。この句は政治の弱體を諷して精緻な皮肉を浴びせかけて居ります。米の問題はますます深酷になつて、今日では選配だの配給だの棚上げだのといふ騒ぎで、幸か不幸かこの句のいのちが今猶持続してゐる譯であります。

「紅しょうが」「配給は」「人寄れば」「新聞の上だけ」の句は何れも配給を詠んだ句であります。が、配給制度の不備が如何に國民生活を脅かしてゐるかが手にさるやうにかがはれるではありませんか「紅しょうがだけの配給どすかいな」のどすかいに多分にいきどほろしさがふくまれてゐることを見逃してはこの句のいのちがなくなりまして。「配給は」の句はただの子生活によつて筆筒の底が見えだした非哀を物語つて居ります。「人寄れば」の句は配給も掛聲ばかりで物の妙なところが、如何に入々の神經を尖らしてゐるかが判るのであり



安産のために

ワダカルシューム錠

ます。「新聞の上だけ」の句は常に配給に關する新聞の報道がぬかよるこびに終るので、新聞を揶揄してゐるのであります。これ等の句は配給制度の改廢によつて句の生命は時と共に稀薄となり、遂には句意すらも解することの出來ない所謂難句の部類に投げ込まれる運命を持つて居ります。

「闇市が」の句は持たぬものの非哀を詠んだ句であります。幾ら物が無い／＼と云つたところで、闇市へ行けば何んでも賣つてゐるぢやないかと云はれて、いかにも賣つてはゐるが、しかし持たぬものには、手も足も出ないのであります。そこで持てる者に對する反感と共に、闇市がのろしい存在となつて來ることを詠んだのであります。

「あの博士」の句は、デモ學者、御用學者、便乘主義學者を諷したのであります。

「メガホンの同じ穴から民主主義」も同巧異曲の句であります。普音機式な指導者階級へ一矢を酬ひてゐるのであります。

「葬式で」の句は尤も嚴肅であるべき筈の葬式で逢つてさえ、米のことに觸れずには

おかないのであります。滑稽を通り越した悲哀を感じさせられるではありませんか。

「よい雨ですと」の句は疎開者心理を掴み出して餘すところなしであり、「男女同權」の句に至つては女性が急激に同權を主張するために醸し出したところの悲劇を髣髴せしめられるのであります。

「婦人運動」の句は世の男達にとつては實に痛快な句であります。婦人運動でもやらうかといふ女性にとつては男に對する反感を更に盛りあげさせるに充分な力を持つた句であります。昔から禁酒や禁煙運動をした女性の多くが何れも男に好かれるやうな顔をしてゐなかつたことを思ふとこの句の穿ち味も相當なものであります。

「そこいらで」の句は物價高が、いかにお互ひの生活を脅やかしてゐるかを示して居り、「元日を」の句に至つては全く悲惨な滑稽だと云はねばなりません。配給の酒は暮のうちに平げて、元日の酒は、ヤミで買った酒、一合飲めば幾らとソロバンを弾く淺間しさを諷して居ります。

「日本の表情」の句は、敗戦日本の表情がタプロイド版

に反映してゐる皮肉さを諷したのであります。タプロイド版と稱して、勝手氣儘に小版の新聞を刊行いたしましたが、値段の点には一切觸れないので事實上の値上げに大衆は呆ツ氣にとられたのであります。これ位、非合理的なことはないのであります。新聞社は頼冠りをして押し通しました。しかし、斯んなやり方は新聞社に限られたことではなく、それこそ日本そのものの表情だつたのであります。

「正何位動何等の」句は敗戦後のドサクサ、倫理性の類廢が言語に絶したありさまを秋霜烈目的に諷して餘すどころがありません。倒れたまゝの墓碑に對して作者は同情の涙をふり涙いでいゝのか、呵々大笑していゝのか、人情の歸趨を知らないのではありません。

「斯うなれば」の句は、物資不足による世情を巧みに描出して居ります。コンニャクを捉えて來たところ、殊に妙味津々云へませう。下五「舌も生き」が味覺の低劣さを逆に曝露してゐるのも面白い表現だと云へます。

「注射薬」の句は前書に、吉田首相に呈すとあります

が、吉田首相に限らず、非常時に際して、特に救國策を持合さない首相なら、どなたに呈してもいゝ句であります。辭めなはれとアツサリ大阪辯で片附けられては吉田首相でなくとも苦笑を禁じ得ないであります。

「五〇〇名」の句をジツと味つてゐると今までの日本人なら泣けて來る句であります。社交係と稱する美給を五〇〇名も募る豪勢さど、その殿堂の華やかさ、嬌笑揺るゝその燈びを想像する時、これが敗戦日本を再建する第一矢とはおもへないのであります。それこそそれ等の灯に對して酒は涙か溜息かではありますまいか。

「ほどけさん」の句も、物資不足、物價高を詠んだ句であります。小さなまんじゆ、しかも十圓のまんじゆに、作者独自のユーモア味

を感受させられるのであります。

「お茶菓子へ」の句も又、物價高におびやかされてゐる人たちが又しても値ぶみしてかゝる習性を巧みに描き出してゐるところに苦笑させられるのであります。

「竹槍に」の句は案外朗らかに詠んであります。竹槍の語に終戦前のモヤ／＼を想起させて一片の憂鬱を誘ひ出して來そうです。しかしB29の雄姿と兒戯に等しい竹槍とをならべて考えると笑えないこともありません。

要するに、時事吟は作者が時事吟として意識すると、しないにかかはらず、その句には多分に社會性、政治性が織り込まれてゐることを條件とするもので、しかも夫れ等の句には、そうした機微に、強く、深く觸れてゐるはるほど時事吟としての妙味を發揮するものであります。

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六
河内・大和方面へは のりば アベノ橋

近畿日本鐵道



村からの出席願に艶があり 今治市文庫

表面は社宅その實社長邸

苦心して手に入れたのが腐りかけ

食ふ話聞の語に今日も暮れ

涼み臺子に星の名を教へられ

發禁の縁の眞近に新作家

才子だが心の友の列に居す

更生をいそいで法に就つまづき

強盜の妻は飯盒でめしを炊き 愛媛縣大

落ちぶれてまだ髭なでるくせがあり

落ち目には水をくむたび體が要り

哥麿の繪がしるこやへよく似合い

無遠慮な男論說委員です

牧師さん二合五勺にふれもせず

米をどぐ音は會社の御宴會

踏切へ汚ない貨車がまだ続き

その爲に立てば消極的になり 鳥取縣志

牛乳は昨日の瓶とまた違い

氷鑒に入れた残りを煩張らせ

製氷所エイ面倒と目分量

洋装がどれもダブつく妻になり

新涼へ持ち越す熱の七度臺

馬鹿でない證據を見せる顔になり 高槻市丁

洋装でなければ更によい女

肥料の効め確かに草が先に伸び

考へて置くではすまぬ目と出合ひ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

路

志

八

庫

さればどて盗みもならぬ狂はしさ

英靈が闇屋とこんで驛を降り 下松市白

戀のさゝやきに南瓜の話も出たのぞ

青い鳥何處も居そうにありません

婚禮の母の寫眞に頬を染め給ひ

女工たゞ長谷川一夫の寫眞と居

貧故の貞操いつしかぐらつて 蘆屋市史

銀めしにどないしたとビルの壁

ブラツトの話勞組をひなんする

スタイルの巷へ女血走しつて

働きに生れたゞけの様な日々 愛媛縣水

こんな月だつたと心若返り

生きる血のつながり鶏へ一握り

或る時は氣兼ねをしてる 検事談

どつちみち灰になるよと御挨拶 大阪市千

罰金で済ますつもりで面憎し

薬局も闇で仕入れたことを云ひ

子澤山末恐しい子もまじり

麥畑はうれし今年のかくれんぼ 宇部市栗

もの言わぬ妻制茶着の汚れ

重役のメモに闇の文字なきや

氣の浮かぬ後姿に兒の寝たり

老眼といふ淋しさを待つ俗務 鳥取市穂波子

愚さは美人と聞いてのび上り

茶葉賣りもう圓單位鼻のさき

停電に四角な窓の月あかり

月影に護手の袂のふと淋し 山口縣ル

私生子といふを薄々知つてきた

ストリートガールに間は利那主義

トウ・シニューズ脱げは素直な嫁で

久し振る女もやアと言ひたそう 東京都汐

米はあるかいと長旅から戻り

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



雜筆春秋

ドン雑談

須崎豆秋

久し振りの雨で、いつべんに秋になり街の灯も明るくなつた。行きつけのドンへ入ると、隅っこの方で西澤黄鳥が音楽に浸つてゐる。

「イヨ一黄鳥久しぶりだなア」「ドンのコヒも今日からホットになつた、もうすつかり秋だね」「君も相變らず喫つてゐるやうだが、たばこにはお困つたもんだな」「君こないたの新聞でどうだ、大丸の屋上から飛降り自殺した青年の手記に「タバコトバク、女」とさんげしてあつたと云ふやないか、あんなのを見るとたばこも深刻な問題だなア」「たばこは捨てつぷり、酒は呑みつぷりと云つて、むかしは半分位喫つて捨てたもんだが昨今は吸殻も落ちてない」

「鳥崎藤村は一日に吸殻を十袋程喫つたそうだが」「文筆にたづさはる者にとつて、たばこは正に自動車のカンランみたいなものだから」「うちの先生も大分たばこには弱つて居られるやうだ」「む

かしの川柳に「敷島を仲居に云へば積んでくる」と云ふのがある。最もその頃の敷島は十銭だつたからなア」「うらやましい話だねー」「ところで西澤黄鳥、きみは川柳の一句も作らずに、おれは川柳人だと自稱して居るのはいがんネ」「いやおれは川柳フワンであることだけで満足してゐる」

何時の間にかドンも満員になつて、やゝフン悶氣が變つて來だしたので、二人は外へ出た。

今、秋の夜の月が街を半分ほど明るくして、風は秋風だ。

清談・商談
お待合せに

喫みどり

みどりでの商談
遅が向いて来る
上六交又點西北角

「これからちよい／＼ドンで會はうか」「よからう、今日はたばこのはなしばかりだつたが、次は君に川柳のはなしでも聞こう」

年甲斐を姉は別間で叱られる 沙 風
 作業衣の汚れも殉職悼まれる 長野縣柳 兒
 要求書社長に會へぬ日が續き 同 同
 じうたんの部屋へ嘆願導かれ 同 同
 藝術家になれず閑居になる日の疲れ 大阪市美 朝
 儲けるのもいいがこはるをさく給へ 同 同
 ビストルの記事にもなれて母は老い 同 同
 運命の女へ汽笛長くひく 京都市瑠 雨
 シミーズになつて氣鬱なロケの宿 同 同
 指定席夏の女の香がのこり 同 同
 鈴虫の聲が止つた散水車布施市千 里
 よう云はんわ大阪辯の腰辨か 同 同
 辨當を二つ持つてる沖仲止 同 同
 電着へ廻る人氣のない女給 金澤市三 笑
 末の子と話がはづむ年となり 同 同
 商事會社何を取引するのやら 同 同
 エロチシズムを詳解せよに母こゝろ 石川縣義 風
 兄さん等はいゝな此の邊稻ばかり 同 同
 新聞を二へんに飛んで蚤は逃げ 同 同
 故郷の豊かさ小麦粉の白さ 岐阜市周 峰
 僕も毛を伸すよの子供には困り 同 同
 横向いて居る生意氣なハンチング 同 同
 木の影で婦人警官鏡出し 大阪市可津美 同
 大會に女將黄色い聲をあけ 同 同
 借金に走る自轉車バンクをし 大阪市葉 光
 日の出を知つて百姓らしくなり 同 同
 若い時などは父は顔を出し 神戸市凡太郎 同
 誇張した話ばかりをきかされる 同 同
 映畫お茶散步と戀の第一課 大阪市晴 夫
 こんな答ぢやなかつた暮の茂りやう 同 同
 政令へ先ず役人が識になり 布施市醉 月
 パラソルをさしたボートへ彌次が飛び 同 同

歸還して見れば女は嫁いでゐる 大阪市ひさみ 同
 同權と言ふが淋しくなる日あり 同 同
 どうせ娘意地をこぼせぬことを知り 兵庫縣花 子
 ビツケルも錆びて父様病みつゞけ 同 同
 まどまらぬまゝで定會ひけにする 神戸市美代子 同
 出張の日はデパートも廻つて來 同 同
 重態へ醫者はストツプ見つめて居 石川縣光 郎
 寢姿は枕に用のない曇さ 同 同
 身體中こそばうなつた母とジャズ 大阪市春 枝
 片山に投票たを板場くやしがり 同 同
 酔へば唄ふ唄を子供に覚えられ 山形市乱 聲
 欠配も知らずに留置場で喰い 同 同
 靈柩車思案の前を横切りぬ 岡山縣北 星
 經濟のはしくれ二階へなすもうえ 大阪府小雅子 同
 ちぎつてはすふタバコ也夜長也 大阪府鬼 八
 行末はあゝなるものか皿洗ふ守口市大龍子 同
 一べんは昔の値段云ふて買ひ 香川縣迷観子 同
 パン食の子等は淋しく食を終へ 大阪府桃 村
 初盆のおそなへ物へ親心 大阪府良 子
 肉體に惚れて見合は成功し 大阪府斜 水
 一房のぶさラリマンは見えてゐる 大阪府葉菜子 同
 改札はしてもせぬでもよい閑屋 吳 市緑 舟
 ため息の膝とも知らず無心の子 津山市茂 穂
 お産映画たつた一人で見たいのよ 愛媛縣棟 友
 女房のくにへゴム靴賣りに行き 大阪府恒 良
 デパートは手狭く住んで客を呼び 新潟縣平 雨
 いつちようちの窓のショッピン 京都市木 立
 座布團をはづしてからも床の軸 大阪府萍 風
 食卓にどれが飯かと箸迷ふ 青森縣菊 川
 相住ひ氣兼ね肉を買うて來る 高知市後 村
 引揚げて無口いよ／＼無口なり 大阪府藤 堂
 腹壓書をふところにして首を吊り 吹田市夜 魚

若き日の

紫香君を語る

竹 内 潮 花

秋雨の降る或日の午后、私は原稿の事で彼を訪れた。隣家から越境して來た藤の葉にしぶく雨の音は銀色に光つてゐた。廊下の椅子に向ひ合つて懸けた私は彼の未發表の創作を、雨の音を聞きながら讀んでゐた。彼獨特のペンの跡を飽かず讀んでゐる筈の私の眸は、いつしか彼の古い日記の上を矢の様にすべつて居た。其の中から幾つかの私の名と妹の名を見つけた。そして若い日の彼の惱みの一切を知つて、私の胸ははりさけさうだつた。何故彼は言つては呉れなかつたか？ 何故私はそれを知らなかつたか？ 燃える様な思ひを自からあきらめてゐた淋しい當時の彼の心境を思ふ時、私の事のみにとらわれてゐた自分を責めずには居られない。コーヒーを飲みほした私は向ひ合つた彼の眸を見た。彼は何も知らない様に古い支那の人達のを拾つてゐた。私の話はフト今は六人の子供の母となつてゐる妹の上にふれてゐた。其の當時彼のひたむきな感情は

ただ日々の日記を書く事によつて自分を慰めてゐたのだつた。實直な彼であるが故に、まじめな戀なるが故に、だまつて秘めてゐたのに違ひはない。戀愛は破れる日が來ても、秘められた思ひは永久に失われはしない。私はこうして向ひ合つてゐる事がたまらなくなつて、早々に飛び出して雨の中に出た。キビの葉を打つ雨の音は私を笑つてゐる様に聞えた。歸りの電車は雨を突いて走つてゐる。私は靜かに眼を閉じた。私の腦裡に何日の日か讀んだ詩が慰めの様に浮んで來た。「嘆き給ひそ惨なきは此の世の戀のさがなれば、戀み給ひそ別るるはあひ見しものの常なれば、仰ぎ給へな夕月は今宵もいかに冴やかなる。」

品質優良

ペン先・針ピン・セムクリツブ

立川ペン先製作所

上 野 市



一部分の

句境を語る

路郎・葦乃・亜鈍

亜鈍「川柳界と云うよりも、今は川柳そのものを進めることですネ。さうですよ、先生。一つ問題を出して下さい。路郎「（眼鏡のふちを仕上げ乍ら）うん。ちや川柳塔から……さうだナア、しかし、問題にするやうな特異な句がないネエ。葦乃「さうですナア。私も特殊な句を搜してゐるんですが……。路郎「今直ぐに問題の句は拾ひにくいですネ。」

路郎「それは違ふ。けれど川柳には矢張り、いづれにしても穿ちがあるネ。葦乃「それをおですけれど、感覚的な句にある穿ちは、この判じもののやうな句と比べたら、判じものの方が、いやらしい——笑聲——いやらしいと言ふなどですけれど……。その代りに、成程ナアと感心させられますし、素人はそれを讀むと、成程うまいこと言ふてゐられるネアといふ句になります。それが、私のいふいやらしいさなんです。路郎「大分レベルの高い批評になりましたネ。」

路郎「レベルが高いといふよりも、デリケートな點が初心者には一寸理解しにくいかも知れない。あんたは、字が二つに割れるといふのが、いやらしいと言ふてゐるが……。葦乃「どう言つたら良いか、妾に、いゝ言葉が見つからない。路郎「つまり、いやらしいと言ふよりは、俗なとか、詩的美がないとかいふ意味なんだらう。葦乃「（首肯して）さういふことですわ。路郎「程度もんだネ。二つだから可いが、これが十に割れる非常口だとすれば、どういふことになるかなア。葦乃「（驚いて）十に割れたりますか。路郎「そらある。どこかの名所にあるかも知れない。しかし、二つに割れるのは誰れでも想像し得る範圍のもので穿ちと割れる非常口が假りに何處かにあつたとしても、それには穿ち味が特定されるし時には穿ち味が殆んどない云

はれ句の態をなさないだらう。路郎「要するに二つ位なら判じられるが十になれば判じられないといふ、程度問題を例證されてゐるんですネ。先生。葦乃「判じものの句と云へないかも知れませんが、穿ちのある判じものの句と比べて、感覚的な判じものの句に、丹路さんのキリストは答へず夏の日と云うのがあります。しかし、十人が十人ともこの句の意味の解し方が違ふでせう。路郎「聖書に親しんでゐる人のキリストと單に西洋の宗教の親玉位しか考へてゐないキリストとは感じが違ふ。葦乃「キリストの傳記にも聖書にも、この句から聯想を産むやうな場面がない。しかし、あるなしにかゝわらず、又聖書やキリスト教に親しみがあつたにしても、わらず、この句の解釋はいろ／＼にされる。そこを多少感覚的な、判じものの句ではないかと云つてゐるのです。路郎「ふん。これがキリストでなく日蓮だと、又感覚が、日本的になつてきますネ。しかし、キリストは丹路自身の主観なんぞでせう。そして、日蓮の激しさに對して、丹路はキリストの靜的なものに彼自身的情緒があるとするれば、例

へば先生の句にその日暮しの家にキリスト様が立ち。その句のキリストはつまり作者の先生ですネ。前者の句のキリストも作者の丹路ですネ。その何れもキリストを作者は感覚的に捉へてゐるが、句から受ける相違。それは、作者の個性とか、句境の相違になるわけであらう。で、これらの句が判じものでせうか。路郎「違ふ。その程度の句を判じものといふのは酷だ。路郎「ところが、數年前の座談會でも取り上げた句なんです。待つほど人間として現れぬ人間が問題になつたんです。が、この句を感覚的な句とは

結核

新編 結核 結核

ネオハツモン

コメット

新編 結核 結核

思ひませんが、判じかねる句なんです。人間が判らないんです。そして當時、四五人の句意の解釋がまち／＼で結局、作者の意圖が捉へられなかつたんです。

路郎Ⅱ兎に角、判じものど云つた句の多くは小主観の句である。それ等の句は時が経つにつれて、自分にも解らない句となるものである(聞)話

は違ふが、風平君の句に、靴磨き痛いところを突いて呼び

と云うのがあるが、痛いところと云うのが、何處か身體に痛いところ、怪我したところ、か、腫物の出来たところとか、いふところを實際に突いたのと、或ひは(胸を押へて)心即ちハートを突いたのとの二様にされるんだ。これは日本語としての欠點で斯うした句を時々発見するよ。

路郎ⅡⅡの場合、どちらにされば可いんですが？

路郎Ⅱそれは云ふまでもなく、ハートを突いたのさ、澄ました顔であるが、靴磨には靴の主の生活環境を靴を透して見てしまつてゐるのだ。だから皮肉な言葉浴びせて、磨かそうとしたのを、痛いところを突いて呼んだと云つたのだ

○ 立腹は第二藝術とか云はれ

はいふ句ですね。この第二藝術は遠原氏によつて最近俳壇へ投げられた一石ですが、その

精しい理論は別にして、田舎の宗匠あたりでは第二藝術が何のことやら解らない方もゐるでせうし、川柳をやる人は勿論、川柳を読む人でも第二藝術なんて全然解らない人もあると思ふんですがネエ。さういふ藝術理論が、そのまゝ腹を立てて、川柳にしてしまふといふこと、そのことを私は問題にしたいんです。

路郎Ⅱ川柳の對象だネ。

路郎Ⅱ對象とか。目的とかいふことになるでせうネ。純粹詩の場合ですと、對象といふものが無くても、詩そのものの内容を詩にする場合がありま

す。ときには詩論を詩に書く場合がありまされど、川柳は川柳的な現實、乃至は現象を對象にすることで、意味があるわけで、川柳で川柳理論を書き、或ひは藝術理論を書くことは川柳の對象にはならないと思ふ。

路郎Ⅱそれは現代の低調な俳句をもつて第二藝術といはれた、といふことに腹を立てて、そのことを提へて、川柳にしたのですからこの句にば對象があるでせう。

路郎Ⅱさう云へば、あります。しかし第二藝術は遠原氏の提供した一理論であつて、その理論をこの句は川柳で批判するやうな風にされた私には、これは必ずしも川柳の對象ではなく、理論は川柳以外のもの

で理論し、研討す可きだと思ふんです。勿論、尊敬する

先輩の句、前田五健氏の名を伏せて私は比較するんです。

○ 路郎Ⅱ大體、考へさす句には皮肉が付きものですナア。れんこんはこゝらで折れと生れつき

路郎Ⅱその句も穿ちやないか。

路郎Ⅱそれで押すと字が二つに割れるの句も、やつぱり穿ちの句でせう。非常口といふ字が、割れる可き筈のものでない字が二つに割れるといふ見つけどころが穿ち？ 一體穿ち？、どういふたら可いかしらん。

路郎Ⅱそれは(腹乃に説くこと)かつてあつたものが、こんどもあつて、それと共通するものを發見した場合、ハ、ンと思ふが、その次の三度目にも矢張りハ、ンと思う

としたら、各人共通に肺腑をえぐるものとなるだらう。(詳しくは川柳講座「穿ちの句に就て」を参照)

路郎Ⅱその言ひ方でしたら、釜の下をどん／＼火を燃したから三十分たてば御飯が炊いて来る、それを何週か繰返しても、穿ちになりますか？

二度繰返されてもハ、ンと思はすものがなければ穿ちやない。共通のものを何週取り上げて、そこにハ、ンがなければ穿ちではないといふ意味でせうネ、先生！

路郎Ⅱさういふ豆腐さんの大毎も止り豆腐やも止りの句など、穿ちある時事吟ですな。

路郎Ⅱあれは昭和九年の關西風水害の時に電力が止つた爲に、大毎新聞社の輪轉機が止り、小は豆腐やのモーターが止つたといふ句意から、電力が止つたことを、はたして今の人が讀んで、そこまで解るか、どうかは疑問なんだな。詳しく言へばその頃の大毎は作業を停止して、慌て、神戸新聞社の助けをかりて、新聞を發行したが、大朝は、その時あるを知つて、重役連中が、ジーゼル・エンジンを用意してゐた爲に、新聞が、悠々發行できたことで、大朝、大毎のまゝ、ゆき方もわかるわけだが、現在の人達では、それが電力が止つたのやら何んで止つたのやら詳がわからない。その當時に、この句は非常に有名な句であつ

たが、句としての生命が短かく、將來は古句研究の對象になる句である。

○ 路郎Ⅱ先生！こゝに「机」といふ象題が席題がしましてネ。例として拙いか知りませんが、

A 老社員、机の下まで頭下げ
B 寶くじ机一つで店が出来

の二つの句が、句の表現、技術が同等のものとして、選考は何れを探るでせうか。勿論Aの場合は、いつの時代でも通じる風景ですし、Bはある時代を一瞬に見せる風景で、後者の場合は時事吟と言へるでせう？

路郎Ⅱ羨やつたら、句に同じ價值があるとするれば、壽命の少しでも長い句をとりまします。路郎Ⅱさうやな。句の價值が同じで、どちらかを採らねばならぬとしたら、やつぱり壽命の長い方をとるのが本當だなア。(文責 路郎Ⅱ)

極くきわどい句境に觸れるため、讀者の句を引張り出したが、例に挙げた句をいゝとかわらうと論議した譯ではなく、ある目やすとしたものであるから諒察されたい。





いのちある句を創れ

投稿規程

用紙は原稿用紙、文字を正しく、開欄月日及場所記入、締切は月廿五日、投稿先本社宛

川柳忌句會

於 生 根 神 社
廿二年九月七日

初代川柳の百五十八回忌の句會を催した。新類も多分出席されて賑やかだった。路郎主幹は「大阪の川柳家」と題し明治末葉に於ける川柳家に就て談話された。

(幹事記)

出席者 美朝・辰巳・小雅子・都・梅里 聖湖・豆秋・鳥莊・風路・文柳・綠雨 美奈子・貞次・太路・愛舟・翠光・好郎・翠人・よしを・古泉・葉平・潮花・鳩花・さん太・喜代志・清花・三窓・多門・十空子・幽王・紫香・没食子・史葉・醉月・栗・竹莊白柳子 悟郎・普天・葉光・北星

兼題「行末」 麻生路郎選

ゆく末のことにふれる戀でも 翠光
行末を孝行な子にたよりきり 平八郎
行末のそれまで生きる米あるか 十空子
行末はごうにでもなれ酒の色 北星
男氣が過ぎて行末案ぜられ 丁路
行末を案ぜますよと義母は云ふ 三窓
母親は晩成とかを不安がり 多門
では先で添はれまき易に問ひ 好郎
藥のな話サラーマンで行こ 路郎
拜金主義をあるくと云ひながら 同

兼題「行末」 須崎豆秋選

男氣が過ぎて行末案ぜられ 丁路
行末を案じて呉れた父の墓 普天

行末の話ちいさく夜の底 葉光
行末を照らす佛であつた筈 幽王
行末を小間使の方が案じ 葉
行末をまた案じ出す女親 紫香
行末を言ふて財布の紐をゆめ 栗
行末をつくく思ふ墓の前 北星
ロソクの灯に行末を占て貰ひ 葉平
行末の語笑ひくき 葉平
きせる磨きつゝ行末を考へる 葉平
行末は膏酸加里で仕舞ふなり 紫香
では先で添はれまき易に問ひ 好郎
生みの子が居らぬ行末案じて居 綠雨
行當りばつたり末を考へず 喜代志
行末のことも意見のうちに入れ 竹莊
行末はごうにでもなれ酒の色 北星
来がある行末なんか考へず 翠人
行末を言ふだけ言ふて貸して 葉平
行末を保険屋二萬圓にきめ 小雅子
きせる磨きつゝ行末を考へる 葉平
行末へ第二封鎖が氣にくき 豆秋
ノ聯から還らぬ父に行末よ 同

兼題「行く末」 西尾 栗選

行末を案じて呉れた父の墓 普天
男氣が過ぎて行末案ぜられ 丁路
行末を思ひつゝ今日を暮らしぬき 太路
行末を思へば嫌な意見も出 よしを
行末を頼まれ申妻なう落ぶれる 梅里
行末があるで頑固な父であり よしを
行末の幸祈りつゝ坂を降り 風路
行末を照らす佛であつた筈 幽王
母親は晩成とかを不安がり 多門
行末をたのみかへらぬ父となり さん太
行末を案じる母の眼と出合い 文柳
行末を案じる母の眼と出合い 文柳
行末を想ふ瞳へガンを飛び 鳩花
行末へ強くあれよと佛間の灯 聖湖
行末を案じし夜學へ送り出し 愛舟
レントゲン人生觀をぐらつかせ 三窓
行末へ己が無學も例に説き 辰巳
ロソクの灯に行末を占て貰ひ 平
神童と言はれて親の氣が迷ひ 三窓

行く末の夢を追はすトラビスト
行く末は血で血を洗ふ産を積み
公園のベンチ行末話すとこ 栗
行末にインフレ時代あるうとは 同

兼題「行末」 竹内潮花選

あこのうちこれか云ふ娘が續き 翠光
行末の経圖が出来た許婚 鳩花
正直が過ぎて行末妻は説き 辰巳
嫌つてから困る行儀叱られる 喜代志
この子皆博士にする親の慾 美奈子
神童と言はれて親の氣が迷ひ 三窓
行末はまたく遠い孫を抱き 風路
行末のそれ迄生き米あるか 十空子
ひとりづゝ氣質のちが子を育て 紫香
行末を思ひつゝ子も職をつけ 没食子
生みの子が居らぬ行末案じて居 綠雨
行く末を案じ子供と今日も暮れ 北星
買出しの子あが日本を背負ふか 好郎
行末を孝行な子にたよりきり 平八郎
ロソクの灯に行末を占て貰ひ 葉平
我儘になると知りつゝ母甘し 普天
行末を思へば嫌な意見も出 よしを
行末は野垂れ死ぬとも添ふ氣なり 丁路
行末を保険屋二萬圓にきめ 小雅子
背筋ふと寒し行末思ふとき 葉平
行末はごうせ三味抱く氣の二號 潮花

席題「でばちん」 黒川紫香選

でばちんを叩き六分酔ふてある 没食子
でばちんの熱へあはてた女親 潮花
でばちんのとこが貴男に似てゐる 同
でばちんの汗拭きえごも 豆秋
でばちんへ粉をつけて出る夕涼 同
でばちんに水泳帽の線がつき 愛舟
でばちんに止まり鏡の最後なり 同
舞殿へ来てでばちんの汗をふき 十空子
子の増るたびにでばちん廣くなり 幽王
でばちんのどこや 風路
でばちんへわき 豆秋
でばちんに蜘蛛の巣ついたらんは 紫香

社告

路郎主幹が、すげ等川柳社主催の全國川柳大會は出席されるので十一月に限り本社句會を第四日曜の廿三日に開催することにした。

川柳雜誌社

席題「日傘」 橋本綠雨選

炎天へ日傘が續く配給日 小雅子
リントクを降り日傘は派手過ぎる 史葉
渡川橋日傘が渡る景となり 葉
受答へ日傘の中で舌を出し 三太
久と振り日傘が廻る立話 辰巳
人ごみをよける日傘はふたりづれ 紫香
繪日傘の心を知らず待たされる 小雅子
人妻と知れる日傘が情をきけ 同
夕立がきて日傘が情をきけ 美奈子
繪日傘も一緒に日傘の役が別れ 美朝
曇りと別に日傘の役が別れ 喜代志
鵲跡の宗右エ門町のゆく日傘 栗
子深山日傘の柄にもめぬいて 太路
繪日傘で頬をかくして待つてゐる 豆秋
贅棒のやうに日傘ふりく 栗
繪日傘でなけりや男と間違はれ 路郎
パスを待つ列に日傘のいゝ姿 文柳
繪に描いたやうに日傘は橋へ立ち 翠光
砂ほこり日傘がくると廻る也 美奈子
おとこに半分日傘傾け 豆秋
買ひたての繪日傘水に映してみ 十空子
夕やみに日傘は少しもあまし 史葉
採しての日傘で子供遊んで居 綠雨

席題「百田札」 互選

百田へ釣きたない札ばかり 豆秋
百田札百枚よんだ指の音 愛舟
百田の札はあぐらをかいて出し 十空子
百田札きれいな帯に挟まれる 喜代志
番茶は百田札に慣れてゐる 三窓
一二枚では百田札ははした金 翠人

世話好きが今日もドア板よはらずし
世話好きも自分一人はもてあまじ
世話好きが鴛鴦屋までもよすなり
夏やせもあらうが遅配十五日
夏やせでもい少しやせたい女學生
うなぎや夏やせによい云ふれど
夏やせで一層襟あし美しく
夏やせを里では芽出度くき流し
寝顔も此の世の人とも思はれず
寝顔見て且那の足が遠ざかり
凶刃を識らずに寝顔笑つてゐる
或る時は妻の寝顔も神々し
水泳を誘へば晝寝口を開け
子の寝顔すべてを忍ぶ氣にもなり

好郎 百生 路郎 生々庵 百生 同 龍川 百生 生々庵 喜代志 路郎

川 岡山支部句會
四月二十六日 於城下禁酒會館
三味線・ため息・風・
まゝごと・色

ブルース・三味に弾かせて良い機嫌
三味を置き十年前の語が出
三味線は無用校歌の朝となり
ため息を心變りのひとに見せ
春の風すいせん狀が着いた音
おじやべりや風が變つた顔でゆき
とりくのたもとへささ春の風
まゝごとに出出しに行く役がつき
まゝごとにあなごと呼んで笑はせる
まゝごとと白いお米が盗まれる
花の下にぼれるお茶が酒に似る
天然の色を冒瀆した映畫
芋あんに昔戀しい色をつけ

通 常 九 坡 不 朽 風 來 子 久 米 雄 格 風 來 子 久 米 雄 同 風 來 子 同 通 常

酒 癖・聲・雜誌・山・母
酒癖はやがていびきとなりけり
酒癖はおこつてやつたこゝに觸れ

風來子 久米雄

五月二十四日 於みどりや

四月二十六日 於城下禁酒會館

三味線・ため息・風・まよごと・色

酒癖を妻心得て二十年 聰夢
この邊で聲がしてゐたかくんは 久米雄
何時からか二階氣まゝな聲さなり 風來子
雜誌から内職を撰る未亡人 雷山
雜誌まで僕の心を批評する 北星
だしぬけに女雜誌を貸してくれ 同
山登りたる所で皆亡り 雷山
うぐひすの値段知らず山に住む 通常
山彦を聞いて女は立ち止まり 北星
仕舞風呂母くつろいだひとり言 風來子

六月 白墨・廣告
白墨に先生小さい咳があり 終
退足の豫告チヨークの軽い音 よしえ
白墨を握つたまゝの電話口 同
廣告へ一月早い夏を知り 風來子
妻の獨斷廣告にひつかり 同
廣告は今日も夕日を浴びてゐる 北星

六月七日 於久米雄居
買出しの淋しい話聞いてやり 久米雄
額なじみ出来て買出しらしくなり 同

川 下松支部句會
六月十五日 於善太郎居
鼠 天井の鼠主人の短氣知り 柳慶
ネヅミの子そろ／＼惡事致へられ 善太郎
寝ていない枕と知らず鼠来る 同

七月二十日 於善太郎居
座布團 座布團へお僧じりぬ足を持ち 秋人
八月十四日 於轉太居
戀 愛 女神とも言つたあの日の戀の嘘 白星
次女三女戀愛結婚するつもり 善太郎
妹の戀人を喫茶店で知り 柳慶

路郎主幹の揮毫作品左の小規によつて同好の士にお願ひいたします。

短冊	一葉	七五〇
同 (新年四季)	五葉	三〇〇圓
色紙	一葉	一〇〇圓
同 (新年四季)	五葉	四五〇圓
軸・額・小物・表装など	五〇〇圓以上	

先生の作品で御希望のものがあれば御指
 定願ひます。申込みと同時に半金お届
 け願ひます。揮毫作品が出来たらお知
 らせいたします。

川柳雜誌社

★一口口金三十圓
幾口でも卓さま
れた。一口分
の原稿は住所と
性と雅號程度。
活字指定はおま
かせ乞ふ。一口
分は五分ノ一
組三行
★原稿締切は十一
月末日限
★廣告料は前金の
こと

嫁と姑

毎日新聞の「建設」ランに次のような記事が載つてゐる。
「杖も柱とも頼む良人を戦場に奪われ留守中父の顔を知らぬ愛児を抱いて歸還の日を待つてゐるうち戦死の報……それからというものは遺児の成長に全身を打ちこんで暮らしてはいますが私たちに對して何んと姑も男も冷酷なものでしよう嫁と姑はコキツカエとか、まるで奴隷のようにならざるを得ないやうにこき使われたうに朝夕身も細るやうな冷遇を與えらるゝのです、男女同權、民主主義時代といふのに姑も男も余りにも封建的すぎます、まるで夫なき嫁を家畜か何かのやうに考へています、たとえ豚でも鶏でも飼えば少しは愛情もわくはずなのに、なぜに嫁が憎いのでしょうか盆踊の歌の文句ではありませんが姑さま「嫁を可愛がれ、嫁こ

をかかれ、娘他國で人の嫁」どうか御自分の娘さんの身の上を思い少しは家庭の民主化に心をかけて下さい」(大阪府下・二十七歳の未亡人)
私はこの姑さんと未亡人に次の句を味讀していただきたいと思ふ。
姑も嫁も好きなりはじき豆 (かほろ)
世間には斯うした仲のよい嫁や姑もあるのである。お互ひに接近し得るものを見つけたことである。仲のよい嫁はお經を讀み習ひと云ふ古句もある。斯くしてこそ家庭に平和の風が吹くのである。私はこのお氣の毒な未亡人がこんな投書をされるまでに、お經を讀み習うだけの努力をされたのであらうか——と云うやうなことを考へて見た。そしてお偉う方が、ヤツサ、モツサでツツあげた新憲法の御利益も、紙の上に書かれた餅のやうに、効果の薄いことを知つた。

▼不朽洞會の強味は何んと云つても路郎が、老ひてます。カクシヤクとしてゐられることだ。老ひてといふ言葉はお嫌ひだが、白髪の数ばかりそえない。しがし席のあたたまるひまのない東奔西走ぶりには、みんなが驚きの目を見張つてゐる。月々新會員が殖えて行くのも電源地は路郎の熱に外ならない。鳥取組の鐵州、湖山、耕民の諸氏、山口縣の路三氏等は多忙な路郎から月々添削批評を乞うて作句に精進されてゐる。須崎豆秋氏の勤務先津村製作所の電話が復舊した。天王寺(77)五二〇六、一〇一五。藤岡至藝瑞氏は稻畑産業の東京駐在重役として月の二十日間は東京生活をされることとなつた。▼水谷竹莊氏

は大阪通信病院の職員隱微大會に川柳すし「縁談と唐辛子」を演じ二等賞を勝ち得たこと。▼蛭子省二氏(愛媛縣)は内子町で悠然と浪人とか「汽車の後押する氣な詩を作り」の句信があつた。▼岩崎柳路氏(兵庫縣)は京都の大鳥居工業所を九月末限退所された。▼弘津柳慶氏(下松市)は九月十四日から十日間廣島地方事務局へ講習受講出張をされた。▼福田山雨樓氏(横濱)の令息が流行性腦脊髓膜炎で入院されたとのこと、一日も早く快癒をお祈りする。▼西川柳榮氏(大阪)が肝臓硬變症とかで重態である。奇跡的な快癒を祈つてゐる。▼戸倉普天氏(丹波)から米、柿、諸が豊作であるが栗は

不件だとのこと。▼竹内潮花氏(大阪)は十一月三日に結婚されるとのこと、およろこび申上げらる。

新會員紹介
九月
岡村路三氏(山口縣) 路郎主幹紹介
國弘半休氏(山口縣)
佐野ト占氏(八代市) 復活
霞乃女史紹介

に覺醒する (公定製薬、プロパティン錠)
ゼドリン錠
★睡氣を防止し
★頭を明かにす

川柳不朽洞會

指導 麻生路郎 中村祐吉
贊助 池澤樂居 洞友 藤村雅光
長谷川一徹 島山一步
笠原路生 沖野岩三郎
高嶋米峰 龜井風修
長野晴濱 川村花菱
藤村作 田村孝之介
藤原退藏 高尾亮雄
淺田一藏 生方敏郎
末弘太一郎 山本雨送
中田守雄 安川久美
白川朋吉 山路閑古

不朽洞會員

—特別會員—

中島生々庵

—維持會員—

福田山雨樓

西田紳樂

永田里九

寺井銳

高澤一浪

石井白面人

戸田古方

石浦西花

橋本波夢造

中原鏡人

仲本玄同子

井上湧三

西川青美

藤岡至藝

平佐平三

大坂形水

村松夢裡

水谷鮎美

三輪晚翠

内藤草一郎

藤井友郎

岩崎山石

前田五健

柴谷幸二郎

蛭子省二

西島〇丸

麻生路郎

高橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本

橋本



六號室

▼雨が降りぬと電燈が点かないなんて考えてもあなかつた。水力電気の建物なんか、一つの風景のやうに思つてゐた。近闊な話だ。エチソンほどの科学者が雨を降らす機械を發明しておかなかつたのは大きな手落ちだ。▼停電と編輯能率の低下、なんて論文にもならない。代用ローソクの灯では編輯もクソもない。Poeの机上は編輯材料よりも全波に關する文獻や組立資材で堆積した。彼のテノールが薄ぐらい部屋の空氣を揺がせてゐる。楡重がよく描いてゐたやうなエキンチックなランプが欲しいと思ふが、そんなものは今時の古道具屋では見つからない。安っぽいランプが二百圓もするんだぞうだが、そんなものならない方がよい。時にはあかりのない編輯室で猫の眼のやうに、クラガリを見据えてゐると、暗さにも、いろ／＼違つた暗さがあることが判つて面白い。▼亞鈍、腹乃、路郎の三人で、「一部分の句境の是非」を談じた。齒に衣をさせず思つたままを喋べつたのを亞鈍氏がノートして呉れたのである。あとで考えると、ある特殊な句境のきわどい點に就てのみ談じたので、例句に引いた句主には、いゝ感じを與へないかも知れないが、醫學の研究のために解剖臺に乗つた位に考へて寛恕されたい。▼本誌も内容が逐號

充實されて行くので、これ以上壓縮編輯もやれない。そこで又々増ページを斷行したが、それでは赤字の上へ更に上をかけることになるので已むを得ず本號から値上げすることにした。諒とされたい。▼増ページで會報欄も少し樂になつた。これで未發表の句會報も歳末までには全部片づくこと、思ふ。▼寄稿なり、會報なりスペースの關係で、遠慮されてゐるやうであるが、遠慮は無用である。何んとかやりくりはして行くつもりだ。いゝ／＼やりくりがつかなかれば増ページといふ手もある。その代り内容を充實させる意味での嚴選主義だけは承知してゐてもらひたい。段々支部も順えてゆくので初心者養成には支部會報で補つてゐた九月廿七日の朝、八時二〇分で發つた。篠山口で待つて云ふ電報だつたので、篠山口に下車したが出迎えに來てくれてゐる筈の無鬼君の姿が一向に見えない。三十分も待つて漸く初對面のS氏があらはれ、僕を自動車に積込んで篠山町へ向けて走つた。車が町々を抜けて鳴鳳中學のグラウンドへ來てビタリととまつた。グラウンドでは今、野球の眞ツ最中だ。川柳會場がこんなところにある筈もないと思つてゐると、「無鬼君が小川町のキャッチャーをやつてゐるんですが、先生が來られるのを氣にしてゐますから、負けるでせう。」と氏は、もう負けることに決めてゐる。篠山町の各町の對抗野球なんだそうだが、小川町には青年が少ないので無鬼君の出場となつたのである。一ト足先に川柳會場の篠山配電局の階上へ案

内され、そこで待つてゐた。晝前に無鬼君が姿を見せた。勝敗はB氏の豫想通りだつたが、本年四十四歳のキャッチャーである。私はその元氣をうれしくも思ひ、羨ましくも思つた。(路)

動靜

▼九月七日午後一時から生根神社で本社川柳忌句會を開催、新人顔も見えて盛會だつた。九月十日夜、向洲文化會川柳部(奈良縣)を翠光居に聞く。路郎主幹出席。九月十二日午後四時から扶桑會川柳會を開く。路郎主幹出席。九

募 集

每號募集 (毎月五日締切)

近作柳樹(雜吟廿句)麻生路郎選川柳(塔)(雜吟)麻生路郎選文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樹」は一般作家の雅吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は不朽詞會員に限る。

月十九日午後二時から大阪選信病院川柳會開催、路郎主幹と縁雨氏出席。九月廿日夜、濱寺支部句會開催、路郎主幹出席。九月廿七日午後一時から篠山支部川柳會開催、出席者三十名、路郎主幹の指導柳話があつた。九月廿四日午後一時から松江市の永泉寺で柳翁忌山陰川柳大會が催され、鳥取から八歩

氏、美笑氏、出雲市から縁之助氏等が出席され盛會だつたとのこと。▼交通局川柳會は八月十六日交通局病院で開催された。川柳廿茶クラブ(金澤)では十月十二日正午から商工會議所で一周年と機關誌改題記念の川柳大會を開催される

由。番傘川柳社では九月二十三日に四天王寺で川柳忌大會を開催された。虫供養萬燈會では九月二十一日に箕面公園内舊蜀水で虫供養川柳會を開催された。愛柳社(山形縣)では十月二日に開催の筈であつた全國川柳大會を農繁期に當るのと各所の大水害などの事情を考慮して十一月三日に延期せられた。龜山晴峰氏は阿倍野區松虫通一丁目十七番地に四西印刷紙業株式會社を創立、その社長として活躍されることとなつた。菊川泰平氏は引揚後、群馬縣までも家探しに出かけであられたが、最近歸郷され九月から山口縣平生町の平生水産株式會社へ勤務されることになつた。伊志田孝三郎氏(名古屋)の二女富美さんが入院されてゐたが漸く危期を出したので退院され日下病院通ひとのこと、全國川柳大會を控へての同氏の苦慮が偲ばれる。一日も早く快癒を祈る。▼むつ社中の京介氏(五條)が十月下旬、華燭の典を挙げられるとのことお喜び申上げる。▼アサヒグラフ九月廿四日號「川柳家告知板」に下記川柳人八名紹介された。周魚、水府、三太郎、路郎、紋太五花村、○丸、雀郎、堀口塊人氏と川柳(○丸、雀郎)は「漱石俳句と川柳」(九月廿日)を執筆。猪股雀童氏(松本)は信陽新聞に「川柳人に視かれた俳句放送座談會」を執筆。山澤碌々氏は「藍」八月

號に「藍に關する古川柳を」執筆された。▼水木眞弓氏は「藍」八月號に「柳多留五篇評釋」を執筆。▼「川柳春秋」が京都市上京區智恵光院通中筋角其社から創刊された

血圧降下には

アーグレミン

血脈アウトホルモンとアミン塩類

山之内製薬

川柳雜誌

B列5號 毎月一回一日發行

一冊 金十圓

(送料五拾錢)

半ケ年概算 金六五圓

一ケ年概算 金一三〇圓

昭和廿二年九月廿五日印刷

昭和廿二年十月一日發行

大阪市住吉區萬代町五丁目二五番地

編輯兼發行 麻生 幸二郎

大阪市住吉區萬代町五丁目二五番地

發行所 川柳雜誌社

振替口座大坂七五〇五〇